
がん

討議総括

清家正博

非小細胞肺癌においては、クラリスロマイシン (CAM) 投与により生存期間が有意に延長したことが報告されており、その機序として、IL-6, TNF- α , IL-10の抑制やIL-12, INF γ の発現増強などが示唆されている。本セクションでは、肺腺癌に対するCAMの抗腫瘍効果や浸潤能への効果を検討した2演題が報告された。金沢医科大学の及川らは、CAMは*in vivo*および*in vitro*の肺腺癌細胞でアポトーシスの誘導を促進することにより、VP-16の抗腫瘍効果を増強すると報告した。その機序としてはBaxの関与は小さく、アポトーシス阻害蛋白質であるXIAPの抑制によることが示唆されたが、更なる検討が必要との見解を示した。今後、臨床例で同様の効果が得られるか、また、

小細胞肺癌でのVP-16の位置付けから、小細胞肺癌でも同様の効果が認められるかどうかは非常に興味深いところである。山形大学の和田らは、肺腺癌細胞に対するCAMの検討で、CAMがthymidine phosphorylase (TP) の発現を抑制することで浸潤能を抑える可能性を示した。胃癌や大腸癌領域においては、TPの発現がS-1やLV/UFTの治療効果と相関するとの報告があり、本演題の結果を踏まえて、肺癌治療でのフッ化ピリミジン系薬剤とCAMとの併用の可能性も考えられた。2演題を含めたこれまでの報告より、実験レベルでのCAMの抗腫瘍効果が明らかになりつつある現在、CAMと抗癌剤の併用等の実際の臨床応用への発展が今後強く望まれる。